

ジョセフとシーザー 鞠莉に恋をする

アッシュクフォルダー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ジョセフとシーザーが  
来日してきて、

Aqoursの面々に振り回される物語  
そして、やがて、ジョセフとシーザーは、  
鞠莉に恋心を抱くようになり…

## 目次

第二部	第一話	ジョセフとシーザー 鞠莉に出会う	1
第二部	第二話	ルビイと花丸に出会う	4
第二部	第三話	ジョセフ ダイヤと出会う	7
第二部	第四話	パジャマパーティー	10
第二部	第五話	ハーレムな毎日	14
第二部	第六話	鞠莉と夜景デート	17
第二部	第七話	ダイヤとデート	22
第二部	第八話	ルビイとジョセフ	26
第二部	第九話	花丸とジョセフ	29
第二部	第十話	三人でデート!	32
第二部	第十一話	ツンデレダイヤ	35
第二部	第十二話	鞠莉の取り合い	38
第二部	第十三話	二人の王子様	41
第二部	第十四話	心に決めた王子様	44
第二部	第十五話	鞠莉の結婚式	47
特別編		ジョセフの恋	50
特別編		ジョセフは女たらし	53

第二部 第一話 ジョセフとシーザー 鞠莉に出会  
う

ジョセフとシーザーは、ある日  
バカンスに行くため、

内浦に降り立ち、宿泊地である  
ホテルオハラに向かっていた。

そんな時、

一人の少女が、ナンパ男たちに絡まれていた…

「そこのお姉さん、俺達と遊ぼうぜ！」

「君 可愛いね、デートに行かない？」

それを見ていた、ジョセフとシーザーは  
その女の子を助けることにした

「オイ、お前ら その辺にしておけ」

「可愛い、女の子が嫌そうな顔をしているぜ？」

「何だと、コラ！」

「オイ、やっちまうぞ！」

ジョセフとシーザーは

ナンパ男たちの相手をして

見事にやっつけるのだった

「おととい、いきやがれってんだよ！」

「全くだ、こんなに可愛いレディに対して

失礼な態度を取る、奴らだぜ」

ジョセフとシーザーは

その助けた女の子に話しかけた

「よお！ 大丈夫かよ？」

「ケガはないかい？ お嬢さん」

「ノープロブレム 心配いらないわ！

助けてくれて、ありがとう！」

「そう言えば、一つたずねたいことがあるけど？」

「何かしら？」

「俺達 ホテルオハラって、言う

ホテルに泊まりたいけど、どこにあるか

教えてくれないか？」

「だったら、案内できるわ！そこ私の家だから！」

「本当か？ ラッキー！」

「じゃあ、案内を頼むよ」

こうして、ジョセフとシーザーは

一人の女の子にホテルオハラまで

案内されるのだった

「そう言えば、名前を聞いていなかったな！」

俺はジョセフ・ジョースター！よろぴくね！」

「俺はシーザー・ツエペリだ」

「私は小原鞠莉、マリーって呼ばれてるわ

マリーって、呼んでね

見た目通り、半分アメリカンのハーフよ

パパがホテルチェーンをしてるせいで

引っ越しも多くて色々な場所に住んでいるの！」

「そうなんだね、じゃあ

このホテルも君の父さんが？」

「そうよ！このホテルもパパが経営しているのよ！」

「実は俺達 そのホテルに泊まるつもりだよ！

バカンスに来ているんだぜ！」

「バカンスに来ているのね！」

内浦はいい所だから、助けてくれたお礼に

「マリーが内浦を案内してあげるわ！」

「おお！ そうか！ そりや、楽しみだぜ！」

「ああ、楽しみにしているよ！」

「それは、そうと、もう到着したわよ！」

ジョセフとシーザー 鞠莉の三人は

ホテルオハラに到着した

「うっひょ〜！ 結構 広いホテルだな！」

「ああ、想像以上に広いな、気持ちいい空間だ」

「お待たせ！ ジョセフ！ シーザー！」

「アフタヌーンの時間よ！」

「丁度 おやつの時間だったので

ジョセフとシーザーは、鞠莉と一緒に

おやつを食べるのだった

「う〜ん！ おいピー！」

「ああ、確かに、こりや、美味しいな！」

「好きなだけ、食べてもいいわよ」

「ほっぺがとろけるぜ！」

「マカロンも美味しいな！」

「あつ、他のお菓子も、美味そうだな！」

こうして、ジョセフとシーザーのバカンスが  
始まるうとするのだった。

## 第二部 第二話 ルビイと花丸に出会う

ジョセフが、内浦の砂浜を暇そうに、散歩していた時の事  
二人の女の子に出会うのだった

(おーカワイ子ちゃん みーつけた！)

話しかけてみようかなー?)

「よおー！ こんにちは！」

「こ、こんにちは……」

「俺の名はジョセフ・ジョースター

内浦に観光しに来た者でな！ よろしく頼むぜ！」

「そ、そうなんですか……」

「お前 名前は何て言うんだ？」

「マルの名前ですか？」

マルは、国木田花丸つて、言います

マルたちに何か御用ですか？」

「えっと、もう一人

ホラー！ 隠れている子がいるだろ？」

「あつ、この子は、ルビイちゃんずらー！」

「ど、どうも……初めまして、黒澤ルビイですう……」

「うっひょー！ 可愛いなー！」

ルビイちゃんつて、言うんだー！

なあ、どっかいかないか？」

「もしかして、ナンパずらか？」

「いや、違うね！」

ルビイちゃんや、花丸ちゃん

どーゆー子なんかなーつて、気になっただけ！

「ジョセフさんつて、どこに泊まっているずら？」

「えっと、ホテルオハラだけど？」

「じゃあ、鞠莉さんの所ずらね」

「マリーの事知っているのか？」

「そういう、ジョセフさんも鞠莉さんの事を  
知っているからか？」

「おー知っているぜ！」

昨日 不良から、助けた事があってな！

マリーの奴 俺に惚れていたんだぜ！」

「本当すらか？」

「あー本当だぜ！」

(といつても、マリーは、シーザーと一緒に

デートに出かけているからなー

それで、暇になっているけどな…)

「ジョセフさんは、どこの国の人ですか？」

「え？ 俺はイギリス人だぜ？」

「全然 そうには、見えないすらか？」

「どういう事だよ！」

「さあー？ どういう事すらかなー？」

「もう！ はぐらかすなよ！」

あーでも、ルビィちゃんも気になるなー」

「ジョセフさんは、浮気性すらね」

「ほっとけ！ にしても、花丸も可愛いけど

ルビィちゃんも捨てがたいしなー」

「あの…」

「おおーやっぱり、近くで見たら可愛いなー！」

「!?!」

「気をつけるすら、ルビィちゃんは、

極度の男性恐怖症すら」

「おっ、おお、わかったぜ」

「あつ、あの…ジョセフさん…」

「おおー！ ルビィちゃん！

やっぱ、顔立ちが可愛いなー」

「そ、そんな、可愛いだなんて…」

「こんなカワイイ女の子たち



話しかけない方が失礼じゃないのか?」

「でも、ルビイは全然…」

「可愛いってば! 俺がそう言っているじゃねえか!」

「あ、あのっ…:ジョセフさんって

一人で来たんですか…?」

「うん? あー二人で来ている!

シーザーって、奴も一緒に来ているけどな!

シーザーの野郎 マリーと一緒にデートに行きやがるし!」

「二人で観光しに来たんですか?」

「おお! そうだぜ! これから、よろぴくねー!」

ジョセフは、ルビイや花丸と出会うのだった。

## 第二部 第三話 ジョセフ ダイヤと出会う

ジョセフは、ルビイを通じて、ダイヤと出会うのだった  
「アナタが、ルビイが言っていた

ジョセフ・ジョースターさんですね？」

「ああ！ 俺の名はジョセフ・ジョースター！」

しばらく、内浦に滞在するから、よろぴくねー！」

「私は黒澤ダイヤと言います

実家はこの内浦で色々な事業をしていて

跡継ぎ候補のわたくしは何かと駆り出されることも多く

毎日忙しくしていて、正直言つて

このスクールアイドル活動に参加する気は全くなかったんです

それが不肖の妹のせいで

何故かこんなことになって…あつごめんなさい、

でも、これは、あなたには関係のないことでしたわね」

「さつき聞いたけど、スクールアイドルってなんだ？」

「スクールアイドルとは、

一言でいえば、ご当地アイドルみたいなものですわ」

「ふーん それで？」

「私は、そのスクールアイドルの

Aquorsの一人ですわ」

「じゃあ、他にもメンバーがいるのか？」

「他には、鞠莉さんもそうですが

ルビイに花丸さん 全員で九人いますわ」

「ルビイも、アイドルやっているのか！」

「初めに言いますけど」

貴方のような軽薄そうな人は、ルビイが怖がりますわ！」

「まあ、確かに、ルビイちゃん

怖がっていたしな…」

「ルビイは、男性恐怖症ですわ

そこだけは、肝に銘じておくように！」

「わかったからさー！」  
だから、怒らないでくれよ！  
オバサンになっちまうぜ？」  
ダイヤはジョセフの足を踏んだ  
「痛つてえーな！ 何しやがる！」  
「ジョセフさん 今何か言いました？」  
「いや、何も言っていないぜ？」  
「こんな、美しい人に向かって、オバサンって…」  
「言い訳は、結構ですわ！」  
「正直におつしやいなさい！」  
「す、すみませんでした…」  
「よろしい」  
「チツ…ルビイと違って、ダイヤは…」  
「!!??」  
ダイヤはジョセフを睨んだ…  
「えっ？ いや何でもないぜ！」  
「なんかこう…ダイヤって、よく見たら  
美しい顔立ちしているなーって思ってたさー」  
「うふふふ。私のことを見つめて…」  
「そんなに美しい顔をしていましたか？」  
「まあ…それなりに、美しい顔立ちだぜ？」  
「もう…美しいだなんて…」  
「よく言われますわー！」  
「あー？ 本当かな？」  
「すみません、わたくしとした事が  
してやられましたわ…」  
「そんじゃあ！ 俺は、もうホテルに戻るかな！」  
「ホテルって、鞠莉さんの所ですか？」  
「おお！ そうだぜ！」  
「はい、そうですか、では、お気をつけて！」  
「じゃあな！」

「あつ、ジョセフさん！」

「どした？」

「その…ルビィには、優しくしてくださいね」

「わかってるって！」

ジョセフは、ホテルオハラに戻り

鞠莉やシーザーと夕ご飯を食べるのだった。

## 第二部 第四話 パジャマパーティー

ジョセフ シーザー ルビィ 鞠莉の四人で

鞠莉の家でパジャマパーティーをしていた

そんな中 ルビィとジョセフは

部屋で会話をしていた

「よおールビィ！」

「あ、あれ？ ジョセフさん

もしかして、聞こえちゃった？

お姉ちゃんに電話していたんだ」

「お姉ちゃんって、ダイヤの事か？」

「うん、そうだよ

つい、さつきまで、お姉ちゃんと電話していたんだ」

「今日はマリーと一緒に

パジャマパーティーだな！

もう、眠れないぜ！」

「えへへっ♪ 今夜は

鞠莉さんの家でパジャマパーティー！」

「ルビィは眠くないか？」

「いつもは、パジャマを着たら眠くなるけど

今日は全然 眠くないの

だって、今日はパーティーだもん！」

「そうだな！ もう、楽しみだったぜ！」

お！ ルビィちゃん 何か持ってきたようだな！」

「うん！ ルビィはお茶を持ってきたんだ

オシャレなお店のショーウインドウに並んでいて

あんな、オシャレなお茶が飲みたいなあ、って、

思っていたの♪」

「どんな味の、お茶だい？」

「ストロベリーティーなんだ！」

それを選んだら、鞠莉さんが

本物のイチゴを入れてくれたの♡」

「それにしても、マリーの部屋は

まるで、お姫様が住んでいるみたいだな…」

「鞠莉さんのお部屋は、

お姫様みたいな、お部屋なんだよ

鞠莉ちゃんは、プリンセスって感じがするから

とっても、似合うんだあ！

それにね、パジャマパーティーって事は

お泊りなんだよ！ お姉ちゃんのいない所で

お泊りなんて、ルビィ 緊張するよ…」

「大丈夫だって、俺がいるから」

「ありがとうございます…」

「ジョセフさんというと、何だか…安心する♡」

「おおーそうか？」

もつと、甘えていいんだよ？」

「えっ？ じゃあ、甘えちゃおうかな？」

ルビィはジョセフの膝で寝ながら喋った…

(ルビィちゃん 小っちゃくて、可愛いな…

俺の膝で、寝ている…)

「さっきまで、正座で待っていたら

鞠莉ちゃんに笑われちゃった！

でもね、鞠莉ちゃんやジョセフさんと

話をしていたら、もう、緊張が飛んじやった♪

今日は、とっても、素敵な夢が見られそう♡

あつ、ジョセフさんって、

いつも、このホテルに泊まっているんですか？」

「おお、そうだぜ

一か月間だけ、シーザーと一緒に

過ごすつもりだから、いつでも、遊びに来いよ！」

「じゃあ、今度は花丸ちゃんと

一緒に来ようかな？」

「おお！待っているぜ！」

「明日の朝 起きた後は

鞠莉ちゃんの家で、朝食か…

お姉ちゃんと、花丸ちゃんも来るみたいだよ？」

「え？ そうなのか？」

「お姉ちゃんは、ルビイを迎えに来るため

花丸ちゃんは、鞠莉さんのご飯が食べてみたいって

言っているから、誘ったんだ！」

「だいぶ 賑やかになつてくるなー」

「鞠莉さんの朝食って、

きつと豪華なんだろうな…」

「きつと、そうだぜ！」

「楽しみにしておこうぜ！」

「うう…：ジョセフさんと、

いっぱいお話したから、眠くなっちゃった…」

「そのまま寝てもいいんだぜ？」

「後で、ちゃんとベッドで寝かしてね…

約束ですよ…」

と、ルビイは、そのまま

ジョセフの膝で寝た…

(やっぱ、寝ている

ルビイちゃん 天使の寝相だぜ…)

ジョセフは、ルビイをベッドまで、運んだ後

鞠莉とシーザーの様子を見に行くことになった

「シーザーの奴 きつと、今頃

マリーといい気になりやがっているな！」

試しに覗きに行ったら…：やっぱりそうだった…

「今日もキレイだよ、マリー

二人きりで、夜景を見られるなんて、

ロマンティックじゃないかい？」

「そういう、シーザーもカッコいいわよ！」

マリーが今まで出会ってきた、オトコの中で

シーザーが一番 カッコいいわ

その次が、ジョセフかしら？」

「ジョセフの奴も、今頃

ルビィちゃんと、一緒に寝ているだろうな……」

「俺は起きてるぞ！」

「なんだ、お前も起きていたのか？」

「三人で夜景を眺めましょう！」

三人は夜景を眺めながら

楽しく会話をした……。



## 第二部 第五話 ハーレムな毎日

ジョセフとシーザーは

内浦に来てから、可愛い女の子に  
囲まれながら、毎日を送っていた  
ある日、ジョセフとシーザーは

鞠莉の家で、朝食を取ろうとしていた

「よおー！ マリーー！ 待たせたなー！」

「やあ、お待たせ、マリーー」

「ジョセフとシーザーが、

早く起きれば、良かったのに…

か弱い乙女達を待たせるのはノンノンよ！」

鞠莉ちゃんはリゾートホテルチェーンを経営する  
イタリア系アメリカ人のパパと

日本人のママとの間に生まれたハーフの女の子。  
だから、日本語にたまに英単語を混ぜる事も多い。  
家は淡島にあるホテルに住んでいる。

(ジョセフとシーザーは、そこで宿泊している)

たまに誰かが、遊びに来ちゃってることもある。

そうそう、鞠莉ちゃんは浦の星学院の理事長でもあるらしい…

「俺は、今 スゲーねみいゝのによお〜」

「もう、朝の8時だぞ？ 朝食の時間だぞ？」

すると、ルビイちゃんも、起きてきた…

「ジョセフさん、ごめんなさい…！」

「ルビイちゃん、良いんだよ！」

俺が早く起きなかったただけだから!!

シーザーが、早く起きたただけだろ？」

すると、姉のダイヤも、やって来た

「ジヨセフさん！」

「ゲッ！ ダイヤー！」

「ルビイを泣かせたら…許しませんわよ？」

「わかっているっつてば！」

そう、怒らないでくれよ！ ダイヤちゃんく？」

「ダイヤのシスコンモード来たわね！」

「私はシスコンではありませんわ！」

やっぱりダイヤちゃんには勝てないぞ…！！

ダイヤちゃんはお嬢様言葉をよく言う女の子で  
浦の星女学院の生徒会長を勤めている。

ジヨセフが、ダイヤちゃんって呼んだ時は

ダイヤちゃんは照れているのが可愛い。

その後怒られてしまうのは言うまでもない。

ダイヤちゃんはμ'sの大ファンらしい。

そして…妹のルビイちゃんは気が弱くあがり症で、

小動物みたいで、可愛くて、俺のお気に入り

おっちよこちよいけど、そこがまたいい！

あんまりイジるとダイヤが

俊足のように飛んでくるのがたまにキズ。

「あのっ、ジヨ、ジヨセフさん…！」

「よお！ルビイ！ よく眠れたか？」

今日も一段と可愛いぜ！ ルビイちゃん！」

「そ、そうですか…あ、ありがとうございます…」

「ルビイちゃんく！ ジヨセフさん！」

「花丸ちゃん！」

「おおく！ 花丸ちゃん、じゃねえかく！」

花丸ちゃんはいつも方言を喋っている女の子  
幼少の頃から運動が苦手らしくて、  
そのせいで読書ばかり読むようになった。  
自分的には花丸ちゃんもスタイル良いような気もする。  
おっと…花丸ちゃんに聞こえてたらヤバいから  
これ以上は言わないでおこう。

「じゃあ、皆そろった所だし、  
ブレックファーストにしましょう！」  
「そうですわね」

「鞠莉さんの家の朝食

きつと、豪華なんだろうな」

「美味しそうなものが、ありそうぞら」

「マリーは、シーザーと一緒に食べるから」

「ああ、行こうか、マリー」

「ケッ！ マリーがいなくても

俺には、ルビィや花丸がいるから、

悔しくないもんね」

「ジョセフさん

ルビィにちよつかい、出したら、お覚悟ですわよ？」

「わ、わかっているよ、ダイヤ…」

何はともあれ、六人で朝食を取ったとき。

## 第二部 第六話 鞠莉と夜景デート

鞠莉がジョセフとシーザーに話しかけてきた…

「ハロー！ ジョセフ！ シーザー！

今度の日曜日開いているかしら？」

「おお！ 開いているぜ！」「どっか、遊びに行くのかい？」

「日曜日だね、ウチのホテルで

小原家主催のパーティーが開かれるの！

ジョセフとシーザーも、一緒にどうかしら？」

「おお！ いいぜ！」「ああ、いいぜ」

「パパの仕事関係のパーティーだけど

友達を誘ってもいいって言われているの」

「マリーのパーティーか、楽しみだな！」

「ああ、俺もマリーのパーティー楽しみにしているぜ！」

「サンキュー！ ジョセフ！ シーザー！

うちが経営する、ホテルだから、

サービスのレベルは保証するわ♪

パーティーも立食形式だから、遠慮はいらないわ！」

「つまり、食べ放題って事か？」

「おおー！ おいぴー料理が食べられるって訳か！」

「そうよ！ 味も保証するからね！」

後 ダイヤヤルビイちゃん、花丸ちゃんも来るみたい！」

「ダイヤからは

隙あらばアクアの魅力を伝えてくださいって

言われているのよ！ 本当に真面目よねえ…」

「アイツのカミナリはこえーしな…」

「そりゃ、ジョセフが問題行動ばかり

起こしているからだろう？」

「なんだとー？ シーザー！」

「本当の事だろ！ ジョセフ！」

「もう！ ジョセフ！ シーザー！」

ケンカするんだったら、誘わないよ！」

「わ、わかったぜ…」「ああ、わかった」

「なら、よろしい！　じゃあ、話を元に戻すわね  
「日が沈めば、ジュエリーボックスを

ひっくり返したみたいなの、夜景が楽しめるわ  
ほんとうにビューティフルよ！」

「マリーとキレイな夜景を楽しみたいな…」

「おい！　シーザー

勝手に、二人でいい感じになるんじゃないぞ！」

「もう！　ケンカするなら、怒るよ？」

「あつ、マリー　ごめん」「ごめんね、マリー」

「よろしい！」

三人で、夜景を見上げる

なんてどうかしら？」

「おお！　それいいな！」

「ああ！　それだったら、どっか行こうかな？」

「ジョセフもシーザーもオーケー？」

うふふ！　嬉しいわ！

あ、パーティーにドレスコードがあるけど

一緒に選んでくれないかしら？

用意は大丈夫？　一緒に遊びましょうね！」

そして、日曜日となり

小原家主催のパーティーが始まった

パーティーが終わった後

鞠莉とジョセフとシーザーは

ホテルの一室から、夜景を眺めるのだった…

「キレイな夜景ね…ジョセフ　シーザー…」

「ああ…本当にキレイだ…」

そういう、マリーもキレイだよ」

「もう！　シーザー！　からかっているの？」

「いいや、本当に君は美しい  
心からそう思うよ!」

「もう!シーザーったら…」

でも、そういうシーザーの所  
けっこう好きよ?」

「ケツ! シーザーの奴!」

マリーとイイ感じに、なりやがって!

俺だつたら…」

「何かあるのかしら? ジョセフ?」

「よし、マリーの言いたいことを

俺が当ててやる!」

「当ててごらんなさい! ジョセフ!」

「お前は次に

(三人で夜景を楽しめるなんて、ロマンティックじゃないの!)  
という!」

「三人で夜景を楽しめるなんて、ロマンティックじゃないの!

…ハッ! もう!」

ジョセフはどうしてマリーの言いたいことが分かっちゃうの?」

「へへっ! 俺は言いたいことを当てちゃうことが出来るのさ!」

「それじゃあ、次はマリーが

ジョセフやシーザーが言いたいことを当てて番ね!」

「おお! それいいね!」 「どんな事を言い当ててるつもりだい?」

「ジョセフとシーザーは次に!

(俺はマリーが好き!) という!」

『俺はマリーが好き!…ハッ!』

「フフフ: ジョセフもシーザーも

本当にマリーの事が好きなんだね」

「たりめえ、だろ!」

「こんなにカワイイ女の子 告白しない訳ないだろ!」

「おい、ジョセフ!」

「マリーと付き合うのは俺だ！」

「何言ってるんだ！ 俺だ！」

「いいや、俺だ！」

「もうジョセフ！ シーザー！」

「ケンカするのなら、怒るよ？」

「じゃあ、どうしたらいいんだ！」

「そうだ！ 俺もジョセフも」

「マリーの事が好きなんだぞ！」

「ホワッツ!？」

「ジョセフもシーザーも：マリーの事が好き??」

「二人とも好きになられたら困りまーす……！」

「もう……じゃあ、私のどこが好きなの？ 教えて……？」

「マリーのカワイイ所かな？」

「それに、面白いし！ マイペースな所もいいね……！」

「マリーは美しいし、上品だ」

「明るくて、たまに見せる行動力が素敵だよ」

「もう！ ジョセフもシーザーも」

「それだけで、マリーの事が好きになったの？」

「それだけじゃないぜ！ ライブで一生懸命な所」

「俺は見えていたぜ！」

「歌声もダンスも、人一倍以上に」

「シャイニーに輝いていたよ」

「…要するにマリーの全部が好きって事？」

「だから、もつと鞠莉の事が知りたいなんて…」

「そんな事言われたら少し照れちゃうじゃない…」

「でも、私の事をしっかり見ててくれるは」

「とても嬉しい事だし」

「これからも応援してもらえるように頑張るわっ！」

「いつもマリーを見ててくれてありがとっ！」

「ジョセフ！ シーザー！」

「じゃあ、どつちと付き合うんだ？

もちろん、俺だよな？」

「それとも、ジョセフよりも

俺と付き合うか？」

「ジョセフ！ シーザー！」

まだ付き合うとかはお預けかなっ！

もっとお互いをよく知っていく事が大切だと思うの！

それから、マリーが好き！って言えるくらい

シャイニーでいい男の人じゃなきゃダメなんだから！

だから一年はお友達：

ジョセフとシーザーが一年後の今日

また私に告白することが条件！

もしダメだったら…？

そうね、その時は一生寝てなさい！」

「よーし！先にマリーに告白するのは

どつちか、勝負だ！ シーザー！」

「ああ、俺が先にマリーに告白してやる！」

「ジョセフもシーザーも、

マリーが認めた男だから、

もつと、シャイニーで

いい男になるように頑張りなさい！」

ジョセフとシーザー 先に鞠莉に告白するのはどつちだ？



## 第二部 第七話 ダイヤとデート

私がこんなことではいけないとわかりつつも  
自分のこの気持ちには嘘がつけず、

ジョセフさんをデートに誘いました…

今日は、はじめての…デートの日

男性の方とデートなんて当然はじめてなので

正直すごく緊張していますわ…

「あ、待たせてしまって申し訳ありません。

実はギリギリまで着ていくお洋服が決まらず

それで遅くなってしまうましたわ…」

「そんなに待つてなかつたぜ？」

今日のダイヤの服 似合ってるじゃねーか」

「今日のお洋服が似合ってる？」

そう言っていただけだと私も大変嬉しいですわ！」

「ダイヤにしては、似合ってるなーって思ってたな！」

ダイヤはジョセフの足を踏んだ

「痛てえ！ 何しやがる！」

「私にしては、似合ってる とは

どういうことか、後で説明してもらいますわよ？」

「うわあ…ごめんよーダイヤ！」

からかってなんかいないぜ！」

「本当ですか？」

ダイヤがジョセフを睨んだ…

「本当だぜ！ 今日のダイヤは

一段と美しいぜ！ 何ていうか…美人だぜ！」

「も、もう！ ジョセフさん！」

そんなに褒めたら、私…照れますわ…」

ダイヤはジョセフに向けて、照れ顔をする

(ダイヤの照れ顔 結構 可愛いな…)

「何処へ連れて行ってくれるのでしょうか？」

「ジョセフさんとなら何処へでも良くつてよ？」

「うーん、そうだなー公園で散歩でもするか？」

「いいですわね！」

今日はお互いのことをもつと詳しく知れそう

そんな日だと思つてますわ。

さ、行きましょ！ジョセフさん！

私の事をエスコートしてください！」

ジョセフとダイヤは千本浜公園で散歩をしていたが

「……………」

「……………ふはあ!!ジョセフさん！」

なんで何も話さないんですのお！」

「息を止めていたのかよ！ダイヤ！」

「そもそも、誘つたのは私ですわ

何か話題を…………しりとりでもしましょうか」

「なんで、そうなるんだよ！」

「そ、そんなことありませんわよ！」

他にも…………短歌とか」

「それは俺のハードルが高すぎるから！」

ダイヤの特技かもしれねえけど！」

「注文が多いですわね

考えますので少し静かにして下さいませ」

しばらくして

ダイヤはジョセフに話しかけるのだった

「ジョセフさん…………ついいですか？」

「なんだ？ダイヤ？」

「ジョセフさんは…………好きな人とか

いませんか？ 好みのタイプとか？」

「え？ うーん ルビィちゃんや

マリーが好きだな！」

それと、花丸ちゃんも捨てがたいなー！」

「ジョセフさん…それじゃ、私は？」

「うーん ダイヤは可愛くないけど

でも、顔立ちは整っているし

照れ顔も可愛かったからなー！」

「やっぱり、ジョセフさん！」

「からかっていたのですね！」

「えっ…誤解！ 誤解だよ！ ダイヤー！」

「鞠莉さんだけでなく

ルビイに花丸さんとデートをしていたのですね！

ジョセフさんは一体

何人の人とデートをしていたのですか！」

「えっ…四人だけど？」

「はあ…呆れましたわ…」

「こんなに複数の女の人を好きになるなんて…」

「もしかして、怒らせちゃった…？」

「当たり前ですわよ！」

私がどんな、気持ちでデートに臨んだと

思っているのですか？」

「あーごめん！ ダイヤー！」

何かおごつてやるぜ？ 好きな食べ物とか！」

「じゃあ…抹茶プリン…買って下さったら

許しますわ、皆さんには内緒にしておいてくださいね」

「おお！ わかったぜ！ 抹茶プリンだな！」

プリン好きなのか？」

「も、もう！ いいですから！」

ジョセフさん！ 早く買いに行きましょう！」

ダイヤは照れながら

ジョセフと抹茶プリンを買いに行った

そう、そうして

もっと好きな気持ちが高まっていくのでしょうかね…。

なので…ジョセフさん…

私の側からずっと離れないでてもらえないでしょうか…？  
ジョセフさんが隣にいないと  
だんだんと不安になってくるのです  
だから…これからもずっと一緒にいてください…  
不真面目で、短気で暴力的な部分もありますけど…  
本当は私　黒澤ダイヤは  
ジョセフ・ジョースターさんの事が大好きですわ!!

## 第二部 第八話 ルビイとジョセフ

ジョセフとルビイはダイヤを通じて、出会っている  
ルビイはジョセフとデートをするため

広場で待ち合わせをしていた

「よお！ ルビイ！ 待たせたな！」

「もう！ ジョセフさん！遅いですよ…」

「ごめん、ごめん！ 待たせてしまつて

すまねえな！ じゃあ、行こうか！」

「はいっ！」

（ルビイちゃん 仕草や表情が可愛いなー）

「あ、あのっ…ジョセフさん…」

「どうした、ルビイ？」

「そ、そのっ…今日はよろしくお願いしますっ…」

「おお！ ルビイちゃん！ よろびくねー！」

「あ…あのっ…どうして、ジョセフさんは

ルビイを選んだのですか…？」

他にも可愛い女の子なら、いくらにいるのに…」

「ルビイじゃあ、ダメなのか？」

「えっ、い、いや…そういう意味じゃなくて！」

「どういう意味だよ！」

俺はルビイちゃん 可愛いと思うよ？」

「えっ…可愛いって…」

いきなり言われても…照れますよ…」

（照れてる、ルビイちゃんも可愛いなー）

だが、ルビイ自身 男性恐怖症であり

ジョセフの事を、怖がっていた。

（どうして、ジョセフさんは

ルビイの事を可愛いって、言ってくれたり

好きになつてくれたりするのかな…？）

「どうした？ ルビイちゃん？」

照れた顔で俺を見つめて！

さては、惚れたな！

どうだい！ ハンサムだろ？」

「ご、ごめんなさい…」

ルビイ、オトコの人は苦手で…

何ていったらいいのか…」

「何照れてんだよ！ そーゆー所も

結構好きなんだよなー？」

「ジョセフさん ルビイの事

からかっているのですか…？」

「えー、どうかなー？」

「もう！ ジョセフさん！ひどいですよ…」

「あーなんか、ごめんな！ 機嫌を損ねたな！」

「謝るなら、いいですよ…別に気にしていませんし…」

「もしかして、怒ってるのか？」

「怒ってないですよ…」

でも、少し…少しだけ…緊張しているんですよ…

ジョセフさんが

ルビイをデートに誘ってくれるなんて…」

「緊張するな！ ルビイちゃん！

今日はいっぱい、楽しもうぜ！」

二人はシヨツピングをした後

ジョセフとルビイはベンチに座って休憩していた…

「ふう〜少し休憩つと…」

「ジョセフさん その…お金

全部だしちやって…いいのですか…？」

「大丈夫だ！ 可愛いルビイの為だからな！

気にするな！ 俺もシヨツピングを通じて…

ルビイちゃんの事 好きになっちゃった！」

「ピギツ!? ジョセフさんって

るるる…ルビイの事がすきなんですか!?

そ、そんな事急に言われても…」

「好きだから、言っているんだよ!」

「で、でもなんでルビイなんですか!?

ジョセフさんの周りには

おねえちゃんとか鞠莉さんとか

もつと可愛くて素敵な人が

たくさんいるのに…

ルビイなんてみんなに比べたら全然なんです…」

「でも、俺とは違って、ルビイちゃん

頑張り屋さんだから、そーゆー所が好きなんだよな!

誰よりも輝いているし!」

「ルビイの頑張ってる姿が好き?」

誰よりも輝いてる? ほんとですか…?」

「ああ、本当だ!」

そうだから、言っているんだぜ!」

「ルビイ、ジョセフさんに応援されると

なんだか安心するし、とても嬉しいの!

だからルビイ、もつと頑張るね!

だからね、すぐに恋人つてわけにはいかないけど…

ルビイの事をもつと、ジョセフさんに知ってほしいし

あなたの事も知りたいの!

だから、一緒にいてほしいなっ!」

「おお! これからも

俺はルビイちゃんの傍に居続けるぜ!」

(ルビイちゃんは俺とは違って

恥ずかしがり屋だけど、でも、頑張り屋さんで芯が強い

そんな所に俺は惹かれたんだぜ!

ルビイちゃん! それに、超カワイイし!

俺としても、ルビイちゃんを守ってやりたいぜ!)

## 第二部 第九話 花丸とジョセフ

ジョセフ自身も 花丸は可愛いと思っっている

「花丸ちゃん 今日も可愛いなー」

もう、好きになりそうなくらいに可愛いぜ！」

「ジョセフさんはマルの事が好き？ 冗談はやめるずら！」

本当は鞠莉さんやルビィちゃんの事が好きなくせに！

からかつてるずらか？」

「からかつてなんかいないぜ！」

花丸は俺の中では、結構 好きな方だぜ？」

「ん？ からかつてるつもりはない??」

「ああ！そうだぜ！」

花丸は俺の中で一番好きだぜ！」

「マルの事が一番好き……？」

そんなこと言われてもマル信じないずら！」

「にやにい!？ 俺が今まで出会ってきた

女の子の中では、結構かわいい方だけどな！」

「ジョセフさんに

本当に心から可愛いって言われるのは

別に悪い気はしないの……

マル、男の人とお話したことないから

すぐに恋人つてワケにはいかないけど

ジョセフさんが良いなら、お友達からはじめたいずら！」

だから、ジョセフさん！ よろしくお願いするずらっ！」

「おお！ 花丸ちゃん！ よろびくね！」

ジョセフと花丸はデートに行くことになった

まずは、二人でおやつを食べに行った

松月のショーケースを覗いて、

食べたそうにジョセフを



見ている姿が、キュートな花丸ちゃん  
ジョセフも思わず、にやけた

「どうしようー」

マル どうしても好きなケーキが  
決められないなら…」

「迷っちゃうよなー！」

じゃあ、俺が花丸の分おごってやるぜ！」

「本当ずらかー！ やったー！」

ジョセフさんは、ふとつぱらずらー！」

「花丸は可愛いからな！」

ケーキ食べてる、笑顔 きつと、可愛いんだろーな！」

「そーやって、マルの好感度を

上げようとしているずらか？」

それは、甘いずらー！ ケーキのように甘いずらー！」

「にやにいをー！ お金は俺が払うって

言ってるだろ？」

「それにしても…すごい、いっぱいある！」

ケーキが沢山あるって…あ、そっか…

ケーキ屋さんにケーキが沢山あるのは

当たり前、かあ…あ、はははは♡」

「花丸 大丈夫か？」

「あ、あの…ジョセフさん

気にしないでくださいね

マル すっかり、緊張してしまっ…

なんか…こういうのは初めてで…

男の人とデートするのは、慣れなくてね…」

「大丈夫だ！ 緊張しなくていいんだぜ！」

「ジョセフさん！ ありがとうずら…」

でも、何でだろう…心臓の鼓動がドキドキして

恥ずかしいずら…」

(そーゆー花丸も可愛いなー)

「実は本音を言うとな、昨日から考えて準備したけど」

ドキドキして、全部どこかに飛んで行ってしまったずら」

(やっば、花丸は可愛い 見た目も愛らしいな！)

「あ、あの！ ジョセフさん！

勇気を出して言いますー！」

「何だ！ 俺に言いたいことがあるのか！」

「マルはさつきから、ドキドキしすぎて

どんなケーキがいいか、全然 決められないから

ジョセフさんが、(これがいい！) って

決めてもらえないですか？」

「よーし！俺が選んでやるぜ！」

おいしそうなケーキをよ！」

ジョセフと花丸は一緒にケーキを選んだ：

机の上に八個のケーキ

花丸はその光景に

お目々キラキラさせていた

「美味しそうずらあ〜！」

「へへっ！どうだ！俺のチョイスは！」

「ばっちりずら！」

それじゃあ、マルとジョセフさんとで

四個ずつ、半分こって事で！

いただきます ずら！」

「いったきまーす！」

ジョセフと花丸はケーキを食べながら

会話を花を咲かせた

## 第二部 第十話 三人でデート!

ジョセフとシーザーは、

鞠莉と一緒にデートに行くことになった。

「ハロー! ジョセフ! シーザー!」

今日は、絶好のデート日和ね!」

「ああ、そうだな!」

俺も、ウキウキしてきたぜ!」

「ああ、俺も楽しみにしていたぜ」

「それじゃあ、マリーとジョセフとシーザーの

三人のスペシャルデートにレッツゴー!」

「おーっ!」

「おーっ!」

「それで、どこに行くの?」

「そうだな、内浦に来たばかりだから、

鞠莉が、行きたい所でいいよ」

「そうね、ジョセフもシーザーも

絶対どこまでもついてきてくれなきゃ、置いてっちゃうから!」

「おう!俺は、マリーに、いつでも、ついていくつもりだぜ!」

「俺もだ、愛しのマリーの為なあ、

どこにでも、行けるぜ!」

「そうね...じゃあ、どこに行こうかしら?」

あつ、お腹がすいてきたから、

ランチタイムにしましょう!」

「おう、そうだな!」

「よーし! 食べるぜ!」

鞠莉とジョセフとシーザーの三人は、

ホテルオハラに、とりあえず、戻り、

一緒に昼食を食べるのだった。

すると...

「なんだと!?!」

このホテルのパスタは、  
インク入りのパスタなのか!? ああ?」

と、ジョセフは、ウェイターの胸倉を掴んだ  
「お客様、このパスタは、イカスミのパスタで、  
ごごいまして…」

「ああ?」

「新鮮なイカスミを使った、パスタですから、  
美味しいですよ!」

「本当か?」

ジョセフは、イカスミパスタを口にした

「おお!これは、美味しい!おいピーぜ!」

「全く:礼儀が、なつてないぜ?」

「ああ?なんだつて?」

「こんなに、かわいいレディーが目の前にいるのに、  
大きな声をだしたら、ビックリするじゃないか」

「そうよ、ジョセフも、

もう少し、静かにしたら、どうかしら?

後、ウェイターに謝って!」

「おつ、おう:ごめんなさい:」

「えらいわ、ジョセフ」

「だろ?俺は、やれば、できる男だからな!」

「全く、調子のいい奴だぜ」

「んだと!スケコマシが!」

「もう!ジョセフも、シーザーも、

こんなところで、ケンカはやめて!

追い出すわよ!」

「お、おう:」

「悪かったな:」

「それじゃあ、デートの続きをしましょう!」

「おう!そうだな!」

「それで、どこ行くんだ？」

「うーん、そうね、一緒に歌わないかしら？」

「カラオケとか？」

「カラオケって、なんだ？」

「俺もさっぱりだ」

「もうう！ジョセフもシーザーも、カラオケを知らないの？」

「全く知らない」

「俺もだ」

「まあ、やれば、わかるわ

「とりあえず、ついてきてね！」

「よし！歌えばいいのか？」

「そうみたいだな」

「まあ、ぎつくりいえば、そうね、

「さあ、三人で歌いましょう！」

「歌えるかな？」

「自信ないのか？」

「シーザー、お前も自信ないのか？」

「知らないからな」

「俺もだけどな」

何がともあれ、三人で、カラオケを楽しむのだった。

## 第二部 第十一話 ツンデレダイヤ

砂浜のベンチに座る、

ジョセフとダイヤ、何やら…喧嘩をしているようで…

「どうして怒ってるんだよ」

「考えてみたらどうですか」

「分からないからいつてんだよダイヤ」

「あっそう、自覚がないのですね」

「もしかして、俺がルビィにちよっかいを出したから？」

「ぶつぶーですわ!!」

「えー!じゃあなんだ分からないああ!!」

必死に謝るジョセフに、中身の無い謝罪は要らないとそっぽ向く

ダイヤは目を合わせようともしない。

ジョセフに心当たりがない事が更にこの状況を悪化させる。

「ヒントですわ、今日楽しそうにしていた事ですわ」

「楽しそうに…していたこと?」

「ええ」

「ダイヤと会えることか?」

「当たり前ですわ、まあヒントを出すなら…」

腕を組んで考え込むジョセフにさり気なくヒントを追加しているが、

ほぼ答えを言っているようなものだった。

ジョセフは偶に出るダイヤのそういう仕草も

態度も愛おしいと感じた。ダイヤの言葉からは女性、楽しそうに会

話、

というキーワードが出た。ジョセフは漸く理解して

誤解を解くべくダイヤの手を掴んだ。

「あっ!俺と出会ってから、一週間とか?」

「そうですわ」

「不安にさせてごめんな、ダイヤ」

「ジョセフ…」

「今度からは些細な事もきちんとダイヤに言うから」

「わ、私こそごめんなさい…」

「ダイヤが謝ることじゃないさ…」

「いいえ！この私が謝る事なのよ、

私が勘違いしたせいでジョセフに酷いこと…」

ダイヤの声がか細くなる、ジョセフはダイヤを抱き締めた

ーギーユツと離れないように。

何分経ったのか覚えていないが、一緒に過ごした。

帰り道、ダイヤの鞆を持つジョセフは横目でダイヤを見た。

綺麗な横顔に思わず吸い込まれそうになる。

「そういえば今度行きたい所あるの、着いてきてくれるわよね？」

「ああ、もちろんだぜ！俺、ダイヤちゃんの事、好きだもん！」

「本当ですか？」

「ああ！もちろんだ！」

「つい、この前までは、鞠莉さんが、好きだったのでは、

なかったのですか？」

「そ、それは…」

「もう、これだから、鞠莉さんのボーイフレンドは！

シーザーさんといい、ジョセフさんといい、

全く…軽薄ですわ！」

「ほとんど、悪口だろ…」

ダイヤのツンデレに心振り回されるジョセフであった。

「じゃあ、ジョセフさんは、鞠莉さんのこと、

どれほど、好きですか？」

「それはだな！もう、ダイヤと比べてら、

鞠莉は、別品で、美人だし！

なにより、俺の好みだからな！

でも、シーザーが邪魔だからよ〜」

「ふーん、そうなんですわね…」

「ああ！だから、俺は鞠莉のことが好きだ！

でも、ルビイちゃんも、花丸ちゃんも、

捨てがたいしな―」

「ジョセフさん…」

「あーゴメンー！一番好きなのは、鞠莉だから！」

と、ジョセフは訂正するのだった…



## 第二部 第十二話 鞠莉の取り合い

キラキラ輝く太陽が、照り続ける、天気の良い日、  
鞠莉は、いつもより、ご機嫌が良い、

そりゃ、いいですとも、

なぜなら、今日は、ジョセフとシーザーとの  
デートだから、いつもよりも、機嫌が良くて、当然だった。

「シーザーとジョセフに、早くあいたいわ…」

ホテルオハラにて…

「おーい！マリー！ここだぜ！ここ！」

「おい！ジョジョ！デカイ声を出すんじゃない！

周りの人たちに、迷惑だろうが！」

「ハロー！ジョセフ！シーザー！」

マリーは、ここにいるわよ〜！」

そう言いながら走って、二人の元へと駆け寄った。

両腕を広げている、ジョセフに、

鞠莉は、思わず、ハグをした。

欧州の国では、よくあることなので、

いい意味で、誰も見向きはしなかった。

軽いハグをしていた、鞠莉とジョセフを

シーザーが、？がすのだった。

「ど、どうしたの？シーザー？」

「マリー、デートするなり、ジョジョのバカが、

変なことをしてしまったね、すまない」

素晴らしいながら、シーザーは鞠莉の頬を撫でる。

陽気でフレンドリーな鞠莉にとっては、

少し照れた表情を、シーザーに見せるのだった。

それを見ていた、ジョセフは、イラッと来たらしい為、

鞠莉は、慌てて、場を和ませた。

「ここから、ハロー！二人とも！」

そろそろ、お昼だし、なにか、ご飯でも食べない？」

「俺とジョジョが奢るぜ？」

「おう！俺とシーザーが出してやるから、

鞠莉は、おススメのお店を紹介してくれ！」

ジョセフとシーザーは、犬猿の仲では、ないものの、  
なんだかんだで、二人は仲が良い。

二人の手を引いて、鞠莉は、走り出すのだった。

陽気な音楽が流れだす、掃除も行き届いている。

そんな、清潔感のある、お店に、三人は来店するのだった。

ジョセフは、チーズオムレツを注文して、

シーザーと鞠莉は、カルボナーラを注文した。

「なあなあ！これ、うめーな！」

マリーも一口食べよ！ほら！

シーザーには、やらねーけどな！」

「全く、下品な奴だな、ジョジョ、

一人で全部食べたら、どうだ？」

「いいわよ、一口だけよ？」

「おお！ありがとよ！」

「マリー、俺の頼んだ、コーヒーも、

美味しいから、一口どうだい？」

「じゃあ、それも、頂こうかしら？」

「これから、どうするの？」

「そうね、思いつきり、体を動かしたいわ、

ボールで遊びましょう！」

「お！それいいなー！どんな、ボール遊びするの？」

「そうね、ビーチバレーボールがあるから、

それで、二十分くらい、ボールで遊びましょう！」

「おう！そうだなー！」

「俺も賛成だ」

こうして、昼ご飯を食べた後、

三人で、ボール遊びをするのだった。

## 第二部 第十三話 二人の王子様

奇跡って、案外、意外などところにあるかもしれない。

例えば、私がシーザーやジョセフと、出会ったことかしら？  
助けてくれた今でも、感謝しても、しきれないくらいだよ。

「どうしたんだい？マリー？」

「ううん、シーザー！ノープロブレム！」

「何もないわ！」

「鞠莉、俺も見えてくれないか？」

二人に出会ってから、私の人生は、大きく変わったの！  
だって、こんなに、頼れるイケメンが二人もいるなんて、  
シーザーとジョセフは、マリーにとっては、  
理想の王子様みたいな人だよ！

「二人に出会ってから、マリーはとっても、幸せだよ」

「急にどうしたんだい？」

「俺とシーザーと出会って、幸せってことか？」

「幸せよ！今まで以上にね」

なんだから、楽しい気持ちになるのは、どうしてかしら？

二人が、笑っているのを見たら、

思わず、つられて笑っちゃった。

「なあ、マリー」

俺とシーザーどっちが、好きなんだい？」

「どっちも好きよ？」

「ジョジョよりも、俺の方が、マリーを幸せにできるぜ？」

「いや！俺の方が幸せにできるぜ？」

「二人ともケンカはやめなさい！怒るわよ？」

「す、すまねえ…マリー」

あつ、じゃあ、どっか行く？イタリア旅行とか？」

「イタリアは、俺のふるさとであり、

マリーの緑の地でもあるからな」

「行きたいわ！三人でデートするわよ！」

「いいのか？」

「もちろんよ！ ジョセフとシーザーも、連れて、  
イタリアへ行くわよ！」

「それで、ハッキリさせたいの…」

「何をだ？」

「どちらかと、結婚すること…」

「マリーの口から、そう言うとは、思わなかったけど、  
いいぜ、勝負だ！ シーザー！」

「この際、ハッキリさせようぜ！」

俺とシーザーどっちが、マリーに相応しい男か、  
決着付けようぜ！」

「望むところだ、ジョジョ、手加減はしないぜ？」

「二人とも、マリーのエスコートをお願いするわ！」

「任せておけ！」

「頼ってくれてもいいいぜ？」

「それじゃあ、三日後に、イタリアへ飛び立つから、  
それまでに、準備してね！」

こうして、ジョセフとシーザーは、

イタリアへ飛び立つ為に、準備をするのだった。

そして、三日後、三人はイタリアへと飛びだった。

飛行機の中にて、

「どうせだったら、果南もダイヤも行けばよかったのに…」

「おいおい、それじゃあ、デートにならねーよ」

「そうだぜ、マリー、イタリアに行つて、

ハッキリさせるんだろ？」

俺とジョジョ、どっちが好きか！」

イタリアの空港にて、

鞠莉が足を止めた。

「将来の為だから、パパも、

シーザーとジョセフを認めているんだもん」

「そうなのか？」

「ええ、二人のうち、どちらかと、結婚しなさいって、

言われているのよ……」

「そうだったのか……」

「でも、どっちにするかは、選べれない！」

だって、ジョセフもシーザーも、マリーが、

認めた男だから……どちらかにするなんて……」

「泣かないでマリー」

「シーザー」

「俺が悲しみを吹き飛ばすくらい、

マリーを幸せにしてやるからな」

「ぐぬぬ……シーザーの奴、キザな野郎だぜ！」

何がともあれ、イタリア旅行が始まるのだった。

## 第二部 第十四話 心に決めた王子様

水の都、ヴェネツィア

潮風に揺られながら、

小原鞠莉は、ジョセフとシーザーを連れて、旅行をしていた。

「んで、どこに行くんだい？マリー？」

「そうね、早速だけど、観光するわよ！」

時間は、待つてくれないわ！」

鞠莉は、活気に、そう言うと、

軽やかな足取りで、歩き始めた。

シーザーとジョセフも、続いて歩くのだった。

ジェラードを食べて、ヴァレットやゴンドラに乗船し、

美しい景色を見渡すのだった。

三人は、次々と名所を巡り、ヴェネツィアを全身で満喫するのだった。

日が傾き、街が黄昏に包まれる頃、

三人は、サン・マルコ寺院に到着した。

寺院の内部には、至る所に、

モザイク画が施されている。

眩いほどの光が、寺院を照らしていた。

「わあ…綺麗…」

鞠莉が、呟いた。

「見事だな」

「すっげーなあ、たくさんの人が、

これを作っただなんて、信じられねーな…」

三人で暫く、天井を見上げていたが、

不意に、シーザーが鞠莉に問いかけた。

「なあ、マリー」

「なあに、シーザー？」

「俺は、マリーのことを…」

その瞬間、ジョセフの身が乗り出し、  
シーザーに口出しした。

「おいおい！シーザー！」

お前、やらしいことを考えているんじゃない!?」

「何、邪魔するんだ！このスカタン！」

今、俺が話していただろうが！」

「そういうの、抜け駆けって、言うんだぜ！」

俺より、先に言わせるか！」

二人は口論状態になった、

鞠莉は、二人の間を冷静に入った。

「ちよつとー二人とも！」

落ち着きなさい！マリーの前で、ケンカはやめなさい！」

鞠莉の透き通った声が、二人の鼓膜を揺らすと、

二人はピタリと静止した。

鞠莉が、一安心した表情を二人に見せて、

シーザーがぽつりと呟いた。

「交互に想いを伝えれば、いいじゃねえか？」

「そうだな、仕方ねえ、シーザーの意見に同意してやる！」

ジョセフとシーザーは、鞠莉を、

じつと、見つめた。

鞠莉は、大きな瞳で、こちらを見ていた。

先に口を開いたのは、シーザーだった。

「マリー、俺はマリーのことを好きだ、

この世の何よりも、キミを愛しているよ、マリー」

「シーザー……」

後から、ジョセフが口を開く。

「俺はシーザーのように、歯の浮くような、

台詞は言えねーけど、俺も、マリーのことを好きだ！」

「ジョセフ……」

二人の告白に、鞠莉は、天井をじつと、見つめた。

「マリーは、どっちを選ぶ？」



「俺にしておけよ！損はさせねーぜ！」

二人は、鞠莉の顔を覗き込み、返事を、  
今か今かと、待っていた。

「私は…」

寺院の鐘が鳴り響く、

彼女がどちらを選んだのかは、言うまでもない。

## 第二部 第十五話 鞠莉の結婚式

こうして、シーザー・ツェペリと小原鞠莉は、めでたく結婚するのだった。

ホテルオハラと鞠莉の家で盛大に、

シーザーと鞠莉の結婚式が開かれるのだった！

「悔しいが…だが！祝福してやる！」

なんだって、シーザーとマリーの結婚式だからな！」

「やあ、ジョジョ、もうすぐ、マリーが、着替え終わるけど、

最後に言いたいことは、無いかい？」

「ねーよ！今はただひたすら、シーザーとマリーの結婚を

祝福してやるって言っているんだ！」

「ジョジョらしいな、まあ、ありがとよ、ジョジョ」

「素直に言う、シーザー、案外初めてかもな！」

「からかっているのか？」

「なんだとー!?せっかく、褒めているのに！」

「まあ、いいぜ、その気持ち、受け取ってやるぜ」

「気味が悪いぜ！シーザー！」

すると、ルビイがやって来た。

「あつ、お姉ちゃん！」

「ルビイ、どうしたんですの？」

「鞠莉さん、もうすぐ、着替え終わるみたい！」

「鞠莉さんのウエディングドレス姿、素敵だったずらく」

「花丸さんまで…それじゃあ、観に行きますか！」

鞠莉はウエディングドレス姿に身を包み、

ダイヤたちに、見せるのだった。

「うわあ…鞠莉さん…綺麗！」

「とつても、綺麗ずら！」

「まるで、堕天使の心が洗われる…」

今日のヨハネは！純白の天使よ！

だって、結婚式だもん！そうでしよう!？」

「善子ちゃんも、今日は、大人しくするずらよ？」

「大人しくするって！子ども扱いするな！」

「マリーのウエディングドレス姿、

褒めてもらえて、嬉しいわー！」

「鞠莉さん、ずいぶんと、ご機嫌ですわね」

「なにせ、愛しのシーザーと結婚するって言うから、

鞠莉ったら、この日を、楽しみにしていたみたい」

「果南さん…」

「まあ、ジョセフも、悔しがりつつも、

二人の事、お祝いしてくれるみたいだし、

それでいいんじゃない？」

「それも…そうですわね！」

「それじゃあ、大広間に向かおうか！」

「豪華な料理が食べられるの？お姉ちゃん！」

「当たり前ですわ、なにせ、鞠莉さんの家ですからね」

「あのマカロンが…また、食べられる！」

「善子ちゃんは、マカロンに気を取られているずらね」

「もう！ずら丸！」

大広間に、みんなが集まり…

「みんな、今日は、マリーとシーザーの結婚式に来てくれて、

本当にありがとう！最後まで、楽しんでいてね！」

「鞠莉さん…いつ見ても、キレイだな…」

「まるで、輝く宝石ずら」

「千歌も、ウエディングドレス、着たいな」

「千歌には、まだ、早いんじゃないの？」

「もう！果南ちゃん！私を子ども扱いする…」

「千歌ちゃんは、いつまで、経っても、

お子様だからね」

「梨子ちゃんひどい！」

「まあまあ、今日は二人のめでたい日だから、

目一杯、祝わないと！」

「曜ちゃん……」

「それじゃあ、みんなで、言おうか！セーのっ！」

（鞠莉さん！シーザーさん！結婚おめでとう！）

「みんなー！ありがとう！」

「とつても、嬉しいよ」

「シーザー！シーザーが好きなの……」

だから、マリーは……」

だから、鞠莉は、そう告げると、

シーザーの元に、やって来る。

息苦しくなるほどの、優しさと、愛しさが、包み込まれるように、

シーザーは、鞠莉を抱きしめていた。

鞠莉とシーザーが、お互いを見つめ合っていた。

「ありがとう、マリー、

それじゃあ、キスをしようか」

シーザーと鞠莉は、誓いのキスをするのだった。

それは、永遠の幸せの証でもあるのだった。

## 特別編 ジョセフの恋

シーザーと鞠莉が結婚して、間もない頃の話だった。  
ジョセフがルビイに話しかけた。

「俺、ルビイちゃんのこと、好きだ」

「えっ？ ジョ、ジョセフさん…？」

「俺なあ、ルビイちゃんが、」

この世の中の、レデイの中で一番カワイイと、  
思っているんだよね？」

「ほ、本当ですか…？」

「おう！ ホントだぜ！」

俺、ルビイちゃんを一生、幸せに出来るぜ？

俺と結婚してくれないかなあ？」

「お姉ちゃんに、相談してみる！」

その後、ルビイはダイヤに、

このことを言うと…

「よしなさい！ ルビイ！」

こんな、軽薄な男と結婚しては、いけませんわ！

ましてや、ジョセフさんと…

そんなの、わたくしが、認めませんわ！」

「で、でも、ジョセフさんは、優しいし、

ルビイのこと、愛してくれて、可愛がつてくれるよ？」

「そんなの、まやかしですわ！」

大体、ジョセフさんは、千歌さんや花丸さんにも、

同じ事を、言っていましたわ！」

「えっ？」

「大体、ジョセフさんは、シーザーさんと違って、

女たらしですわ！ 鞠莉さんとシーザーさんは、

お互いの事を愛していましたわ！」

「う、うん…」

「こんな、軽薄で女たらしの輩である、

ジョセフさんとルビイとの、お付き合いなんて、ちゃんちゃらおかしいですわ!」

「花丸ちゃんや千歌さんのことが、好きなのも…

ルビイはわかるよ?

でも、ルビイは、ジョセフさん以外の男の人と、

その…上手に話せなくて…」

「大体、ルビイ。

どーして、こんな奴のみに限って、

平気なんですか?」

「だ、だって、ジョセフさん…最初は怖かったけど、

優しいから…それに、可愛がってくれて、

それに、ルビイは、ジョセフさん以外の人とは、

愛することが出来ないって、思っているから!」

「ルビイ…」

「だから、お姉ちゃん!

ジョセフさんのお付き合いを認めてください!」

「わかりましたわ。

これからの、ジョセフさんの態度次第ですわ。

それでも、ジョセフさんにも、いいところがあると、

思いますが、あんな、短気で軽薄で、軽そうな輩との、

結婚なんて、わたくしが認めませんから!」

その後、ジョセフの元に、ルビイがやって来た。

「ジョセフさん!」

「ルビイちゃん!」

「ジョセフさんは、ルビイのこと、好き?」

「もっしろん!大好きだぜ!可愛いし、優しいし、

守ってやりたいぜ!」

「じゃあ、ルビイだけを、愛してくれますか?」

「も、もちろんだぜ!」

俺は千歌や花丸の事も、好きだけど…

でも、一番はルビイちゃんって、決めているんだ！」

「じゃあ、これからは、ルビイだけのことを、

見てくれないか！守ってくれませんか！」

「もちろんだぜ！未来永劫、俺がルビイちゃんを、

守ってやるぜ！」

二人の恋、そして、結婚は叶うだろうか？

## 特別編 ジョセフは女たらし

ルビイは、ジョセフ・ジョースターに恋をしていた。しかし、ジョセフはルビイの事を可愛がりつつも、千歌や花丸も、可愛がって、おまけに、千歌、花丸、ルビイに対して、愛していると、ジョセフが言い出す始末である。ルビイは、思い悩んでいた。どうしたら、ルビイだけのジョセフでいてくれるのか、悩みに悩むのだった。

(ねえ、ジョセフさんは、どうして、ルビイを選んでくれないの？それに、ルビイだけを愛するって言っていたのに、どうして、千歌さんや花丸ちゃんにも、同じことを言うの？)

おかしいよね？  
ジョセフさんは、ルビイだけのジョセフさんなのに…ヤキモチ焼きいちゃうな…  
ねえ、どうしたら、ルビイだけの、ジョセフさんになってくれるの？  
ジョセフさんの為なら、ルビイは、何でもするよ？  
だって、ジョセフさんは、ルビイの王子様だもん！  
ジョセフさんは、こんなにカワイイ、ルビイを、見捨てないよね？ルビイは待っているんだよ？  
ジョセフさんのことを)

ルビイが、ジョセフを誰よりも愛していると感じていた。

(なんだ…？どーいう訳か、

最近のルビイ、俺に対して、アプローチが、スゲー気がするけどよお、何かあったのか…？)  
ジョセフは、ゾツとしていた。



「ジョセフさん」

「おっ！ルビイちゃん！今日もカワイイなく！  
惚れ惚れちゃうぜ！」

「本当ですか!?嬉しいな…」

「ねえ、ジョセフさん」

「何だ？」

「ジョセフさんは、ルビイの事、好きですか？」

「もっちらんだ！俺はルビイしか、愛しないぜ！」

「じゃあ、花丸ちゃんは千歌さんよりも、

ルビイの事、好きですか？」

「ああ！俺はルビイちゃんが一番、好きだぜ！」

「ふーん…じゃあ、これから、ルビイだけを見て欲しいな…」

「も、もっちらんだ！当ったり前だぜ！」

しかし、ジョセフは口だけのようらしく、  
ルビイに隠れて、花丸や千歌に対しても、  
愛していると好きだと言い出す。

それを花丸と千歌は、ルビイに言った。

「ジョセフさんの、ウソツキ…許せない…」

「ジョセフさんは、最低ずら。」

だって、マルやルビイちゃんや千歌さんに対して、  
愛しているの、好きだの、言っているずら

「ジョセフさんって、私達のような、

カワイイ子が好きなのかな？たらしだね」

「でも、浮気は許さないな…」

「だったら、お仕置きが必要だね？」

千歌は鉄パイプ、花丸は金属バッド、

ルビイは竹刀を、どっからか、入手して、

ジョセフ・ジョースターを呼び出した。

「ゲッ…！」

「ねえ、ジョセフさんは、ルビイしか、

愛さないって言っていたよね？

どうして、花丸ちゃんや千歌さんにも、愛してるって言っているの？浮気だよ？

許せないな〜」

「ジョセフさん、浮気はダメずらよ〜？

マルは、こういう浮気性の男は、嫌いずら」

「ジョセフさん…可愛い女の子が大好きだよね？

じゃあ、千歌とルビイちゃんと花丸ちゃんの、

愛をめいつぱい、味わって欲しいな…」

「へっ？」

ジョセフは、三人に誰もいない場所で、

ボコボコにされるのだった！

しばらく、ジョセフは、気絶していた。